
赤い携帯電話

上月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い携帯電話

【コード】

N0210T

【作者名】

上月茉莉

【あらすじ】

赤い携帯電話を拾ってから不思議な事が起こり始めた。

『お仕事お疲れ様』

『夜更かしはいけないよ』

『そろそろ起きないと』

俺がそんな健気なメールを貰ったのは、この赤い携帯電話を拾ってから的事だった。持ち主へ連絡する為だからと詫びつつ、アドレス帳を見てみたら見事に登録件数がゼロだったのだ。

それでもこのメールは気紛れに無機質な受信音を鳴らす。俺はその都度持ち主からの連絡かと期待して、肩を落とす羽目になった。健気にもメールを続けるこの相手は、よっぽど持ち主が好きなんだろうな、と余計な事を思う。

翌日虚しい一人暮らしで自炊をしていない俺が、コンビニで買って来たカップ焼きそばを啜っている時、赤い携帯電話から受信音が聞こえた。

犯罪なんだろうが、メールを覗き見してしまう悪い癖が身に付いた俺の目に映った文字。情けないが驚いてしまった。

『ねえ、焼きそば美味しい？』

……一体送り主は誰にメールを送っているんだろうか。その疑問が明かされる事はなかった。それどころか俺はそのメールの奇妙な一致に薄気味悪さを覚え、慌てて携帯を畳んでソファに放り投げてしまった。

その日、携帯はメールを受信しなかった。

単なる偶然だと自分に言い聞かせてから一週間程経った。交番に行けば良かったんだろうが、仕事が忙しくてそんな時間作れない。今も今とてパソコンに向かってエクセル処理をしているところだ。

その時、俺の後ろから無機質な電子音が響いて来た。直ぐにあの

携帯が受信したと判り、立ち上がって携帯を取りに行く。開いた先の画面の文字に俺は薄く笑みを浮かべていた。同時に恐怖と言う感情も覚えていた。

『お仕事お疲れ様、頑張つてね』

俺はお茶が飲みたくなってやかんを火に掛けた。間抜けな音が沸騰を知らせる。それに気付いてやかんを掴む。

だがしかし不注意からやかんを傾けてしまい、俺の剥き出しの足に熱湯が掛かってしまった。

「あつ！」

思わず叫ぶ。ひりひりして痛い。

こういう時の応急処置は……と思い出す。取り敢えず冷やそうと思ひ、熱湯の掛かった足に体重を掛けない様に冷蔵庫まで歩いていく。

その時メールを受信した音が響く。今更の説明だが俺の携帯電話は常にマナーモードなので、瞬時にこれが例の赤い携帯電話の音だと理解出来た。こんな時に何だと内心悪態を吐いたが、俺は冷蔵庫を開けるのを中断して癖で手を伸ばし、メールをついつい見てしまっていた。

『氷を直接皮膚に当てたら駄目だから』

こんな内容だった。

俺は今までの事もあつてかはつとなり即座に後ろを振り返る。素足に感じる熱に構う事はなかった。

一人暮らしなんだから当然と言えるが、ワンルームのどこにも人の姿はない。

「う……うわあああ」

それを確認してから俺は思わず情けない声を上げていた。何に對しての声かは判らない。敢えて理由を付けるなら、その瞬間に感じた恐怖だろうか。

薄気味悪さを感じた俺は手にしていた携帯電話を、勢い良くクツ

シヨンに向かつてそれを放り投げていた。この時はクツシヨンに埋もれた携帯の赤色が、血を彷彿とさせて不気味な物に映り、本能的に固く目を瞑ってしまっていた。

俺の気持ちがいかに落ち着いた頃。携帯をすっかり怖がつてしまった俺は、携帯をクローゼットの奥深くにしまい込んでいた。多分メールを受信してもその音が耳に入る事は無いだろう。俺はすっかり安心して、お笑い番組を映しているテレビに見入っていた。「あはは」

笑い声しか響かないと思っていた室内。突然ぴろろと言う音が俺の背後から響いた。

ビクツとして見るからに身体が震えた。慌てて振り返る。クローゼットにきちんとしてしまった筈の携帯が床に落ちているのが判った。勘違いだったのかと自分を納得させながら、恐る恐ると言った様に手を伸ばしそれを掴む。

携帯を開いてメールを開く。

「ひっ」

思わず俺は短く叫んでしまった。そこに書いてあった文字が何時もみたいに微笑ましい物なら、こんなに背筋に冷たい物を感じなかったと思う。

『今から行くね』

これが本当に落とし主に宛てたメールなら、俺は何も感じなかっただろう。だけど今の俺にはこれがどうにも他人事には思えなかった。

怖い。怖い。

俺の感情は今恐怖と言う言葉で埋め尽くされてしまった。はつとなり玄関を振り返る。何も変わりはない。それ以上玄関を直視しているのが怖くて、俺はそこから視線を外してしまった。

落ち着こう、とは思ったが上手く零れ落ちそうになる感情を制御出来ない。

こんこん、と小さくて感情を伴わないノック音が耳に入った時の俺の気持ちは、上手く説明出来ない。使い古された表現だが、本当に心臓が止まるかと思ってしまうたが一番近いだろう。

振り返って玄関を見るのが怖かったから、背後は見ようとは思わなかった。見たいなんて気持ちがない。

狭いワンルームの中を俺は振り返らずに、這い蹲る様にして隅に逃げていた。これで友人だったら笑えるな、と言うユーモラスな考えは不思議と出て来ない。

不意に背後に足音と寒気を感じた。

「ひっ……」

俺は自分で聞いていてもそれと判る様な情けない声を上げ、掴んだままだった赤色の携帯電話をますます強く握り締めた。

玄関から一步一步足音が近付いて来る。普通では考えられない出来事に直面すると、人間死を覚悟する様だった。

「う、うわあああ！」

半ば半狂乱だったとは言え俺は叫んでいた。この時の俺は、恐怖を緩和出来る手段が叫ぶしか思い当たらなかったのだ。叫んだ俺は手に持っていた携帯電話すらも壁に向かってぶつけていた。

トマトが潰れる様にはいかなかったが、あの赤い機械が見事に半分に折れてしまった。衝撃だけで壊れるなんて、余程だったのかと場違いな考えが頭をよぎる。

けれど不思議な事は重なるらしい。靴音はその瞬間からぴたりとなくなり、背後から近付いていたおぞましい寒気も消えていた。

「え……？」

信じられなくて間抜けな声で呟く。瞬きを何回かしたがそれは変わりそうにはなかった。つい背後を振り返る。そこには俺の懸念していた様な乱れ髪の幽霊は居らず、ただ玄関に続く廊下が静かにあるだけだった。

こんな体験、誰にも言えなかったし確かめたいとも思わなかった。

けど時折確信にも近い思いが俺を支配する。

— 一体俺は誰に見られていて、誰に訪問されていたのだろう……も
しかしたら……？

その答えは出なかった。ただ一つ確かな事は、携帯が壊れてから
俺を襲う不思議で恐怖な出来事はそれ以来何もなかったと言っ事だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210t/>

赤い携帯電話

2011年5月5日15時55分発行